

本書には、このような興味尽きせぬ多くの謎がきわめて自然に提供され、具体的に、わかりやすく解かれており、歴史の面白さを味わわせ、考えさせてくれる。

ちなみに、パドヴァ大学をわずか五年あまりで去った彼は、スペインの宮廷の侍医になって活躍したが、解剖学についても情熱を持ち続け、一五五五年には改訂版を出している。そして、パドヴァの次の次の教授であるフロロピオの死（一五六一）の後に、もう一度解剖学の教授に復帰したいと欲したが果たさず、イエルサレムの聖地からの帰途、ザンテ島（現在のザキントス島）で、四九歳（ザンテ島にある墓石には五八歳と彫られているという）で孤独な死を遂げるなど、後半の足跡にも謎が多い。

肩を凝らさないうで読める、やや小型（B6判）の本書を一読すれば、優れた解剖学者、組織細胞学者であるとともに、深い学識と教養と慧眼を備えた著者が、遠い昔の古書のオリジナルを繰り、多くの文献を渉猟し、歴史的な背景をよく調査して書かれた名著であることがわかり頂けよう。

解剖学や医学の歴史に関心のある方はもとより、医学生、医師、自然科学の研究者、一般の方々などに広くおすすみたい本書は、人間の創る自然科学が、どのようなファクターにより、どのような曲折を経て発展してゆくかの生きた実例を示しているといえよう。とくに医学生にとっては、必読の教養書である。

本書をひもどくとき、医学、解剖学の発展に革命的な影響

を与えたヴェサリウスのフアブリカやエピトメーが、突然無から有が生じることによって誕生したのではなく、ヴェサリウスが古代からのガレノスやアヴィセンナやモンデイーノらの解剖学をよく学び、その基盤の上に立って、自らの手を汚し自らの眼でつぶさに人体を観察した結果、いわば人類の築いてきた学問を、自身の努力によって得た解剖的観察によって止揚（aufheben）した結果、生まれたものであることが具体的に理解できよう。

蛇足ながら、最近、日本の若い世代の教育において、個性とか独創性という言葉が誤用されて、基本的な学問の修得を軽視する傾向にあることを、私は悲しむ。

独創性や個性は、決して無から生ずるのでなく、普遍的な基礎的知識を身につけ、その上に立って生まれてくるものであることを、本書から具体的に学び取ってほしい。

ともあれ、楽しく読める、示唆に富んだ、素晴らしい本である。

（藤田 尚男）

〔筑摩書房…東京都台東区蔵前二一五―三、平成十一年十月十二日、B6判、一九八頁、本体一、二〇〇円〕

ヴォルフガング・ミヒェル 著

『ライプツィヒから日本へ』

本書は、カスパル流外科の開祖といわれるカスパル・シャ

ムバーガー(日常会話ではシャムバーガーだが、改まって書くときはシャムベルゲルで、本書では常にそう書いてある)の伝記である。しかし日本では一六四九年彼が江戸に滞在した一〇ヶ月間と、次に使節団に同行して江戸に来た時のことしかわかっていない。彼の幼少年期のことや、一六五〇年代半ばに帰国してからの後半生のことは、本書で初めて明らかにされたといえる。彼が少年期の頃、外科医の免状交付をめぐる床屋と風呂屋が競い合っていた。彼は理髪外科医の道を選び、免許取得後は北ドイツ、デンマーク、スウェーデンを廻って修行し、ついにアムステルダムで東ドイツ社に職を得た。彼は大変な困難を乗り越えてパタビアへ着いた。社命で東インド諸国を巡ったのち一六四九年に日本に赴任した。

シャムバーガーが初めて江戸へ来た時、將軍家光は病床にあった。シャムバーガーは西洋の技術や医学に関心を持つ大目付井上筑後守政重に注目され、使節団が長崎へ引き上げた後も幕府の要請で一〇ヶ月も江戸にとどまり、幕府高官の治療や、持参した薬品の説明にあたった。その他彼の活動については、通詞猪俣伝兵衛が幕府の指示を受けて報告書をまとめており、その写本がカスパル流外科の台本となった。カスパル流外科の伝播については、河口良庵が大きな役割を果たしたことを本書は伝えている。

一〇年余り東アジアで活躍したシャムバーガーは一六五〇年代半ば頃、ヨーロッパへの帰郷を決心した。彼は生地ライプツィヒへ帰り、外科医をやめて、よりよい収入と名声を得

られる商人という職を得た。市民社会への社会復帰は成功した。彼はある商人の未亡人と結婚するが、彼女が数年後に亡くなったあと、市の参事会員の娘と結婚した。彼の社会的地位が向上したことがわかる。

その後生まれた長男は医学部教授になり、後には学長となった。その頃シャムバーガー家の邸は市の面積の三分の一におよび、富と繁栄を表している。彼は、異例の長寿を全うして一七〇六年に死去した。一家は短期間に高い地位に上りつめたが、落ちるのも早かった。教授になった子が五十代で死に、孫達も早逝して、娘達は他の地域へ嫁いだため、シャムバーガー一家の名前は十八世紀半ば頃には市民台帳から消えた。

著者がシャムバーガーについて初めて発表したのは、第八〇回日本医史学会(熊本、著者が会長)であったが、そのときシャムバーガーがオランダ人ではなくドイツ人であること、その戸籍がライプツィヒにあることを聞いた。それから短期間にライプツィヒやオランダを訪れ、多数の資料を発見・収集し、カスパル流外科のいきさつが明らかにされた。残念ながら本書はOAGの出版であるため(筆者も会員)難解なドイツ語である。速やかに和訳が出るのが望ましい。

(鹿子木 敏範)

LAG-Haus: 11-107100511 東京都港区赤坂七-151  
五六、電話〇三-三五八二-七七四三、一九九九年、A5判、三〇四頁)